

〈資 料〉

食べ物の名数

(1) 五穀 (上) : 中国古典に見られる五穀

A Denominate Number for Food

(1) “Go-koku” (Five Main Cereals) (Part One) : “Go-koku” Shown in Chinese Classical Literature

森 田 潤 司
(Junji MORITA)

はじめに

古来、新年には宮中でも民間でもその年の穀物の豊作を願い、その年の出来を占う行事が行われる。また、秋には穀物の収穫を喜び祝う祭が行われる。古代中国でも、皇帝の最大の役目は穀*1の豊穰を祈ることであった。皇帝は季節季節に明堂で儀式的に決まった穀を撰って祀り、新穀が穫れば新嘗祭を行って祖先或いは天にささげて収穫を感謝した。この時の穀は五種であることが多く、五穀と云った。五穀とは穀物全般を総称した語としても用いられた。五穀登衍^(注1)、五穀豊穰^(注2)、五穀成熟^(注3)、五穀豊熟^(注4)などという記述が中国及び日本の古典に見られるが、これらは穀物の豊作を願うものである。後代、主食とした重要な五種類の穀物を指して五穀というようになったが、五穀の内容は時代や地方によって異なっている。五穀の内容を見ていくと古代中国及び日本において重要とされた穀物とその栽培の歴史などを知ることができる。

本稿(上)では中国の古典に見られる五穀の内容を、別稿(下)¹⁾では日本の古典に見られる五穀の内容をそれぞれまとめて、研究の便宜に資することとした。なお、五穀に挙げられる植物については注にまとめた。

五穀と百穀

『大漢和辞典』²⁾や榎³⁾によると、古文字では、五を×またはXと書き、Xの字の上下の横線はそれぞれ天と

大地を表し、×は陰陽の交わりの象徴である。つまり、天地間において陰陽の気が交わることで、水・火・木・金・土の五行が相剋し或いは相生して陰陽が交互し、その結果地上に実る穀物が五穀である、という。したがって、五穀の五は数として限定したものではなかったが、後に代表的なものを五種類挙げるようになったのである。このため、五穀という名称は中国のきわめて古い文献には登場しない。数多くの穀物という意味を表す語には百穀^(注4)を使っている²⁾⁴⁾。篠田『中国食物史の研究』⁴⁾によると、表1に示したように、周代の『詩経』、『書経』、『春秋(左伝)』、『国語』^(注5)などすべて「百穀」である^(注6)。また、時代が少し下った『晏子』、『論語』ならびに『商子』には偶然であろうが五穀、百穀、どちらの語も見当たらない。さらに、篠田『中国食物史の研究』⁴⁾によると、表1には掲げていない『老子』には穀物を示す語はただの一つも見当たらないという。

戦国時代、諸子百家の世になると、五行陰陽思想の影響を受けて百穀の語が姿を消し、五穀という語がでてくるようになる⁴⁾。表1に示したように、『戦国策』、『孟子』、『荀子』、『列子』、『墨子』、『韓非子』、『楚辞』、それに秦代となるが『呂覽(呂子春秋)』^(注7)などである。なお、表1では『莊子』にも五穀がないことになっているが、『莊子』⁵⁾には五穀の語がある^(注7)。

五行陰陽思想にしたがって穀物を五でまとめる場合、五穀の他、五粟(表1)、五種(表1)あるいは五稼^(注8)の語も使われる。別に三穀、六穀、八穀、九穀などとまとめることもある。いわゆる名数である。

名数について、たとえば鑄方は『日本古代穀物史の研

食べ物の名数

表1 中国古文書に見る五穀と百穀（篠田『中国食物史の研究』第1表⁴⁾より改変）

	詩経	書経	春秋		国語	晏子	論語	莊子	商子	国策	管子	孟子	荀子	列子	墨子	韓非	楚辞	呂覽	計	
			経	左伝																
百穀	5	2		1	3															11
五穀										1	46	3	2	2	5	2	2	11		75
五粟											5									5
五種											2							2		4

*『呂覽』（BC 239）は『呂子春秋』とも呼ぶ。

*同一文章で同じ字が続げさまに出てくるときは一回とみなしたが、比較のため『詩経』『管子』および『呂子春秋』では出てきただけ全部一つずつ数えた。

究⁶⁾において、加藤『支那古田制の研究』⁷⁾の記述〈五穀六穀九穀の穀名に就いては古来学者の間に議論が喧しいのだが併し此れはあまり重要な問題ではない。五穀九穀などいふのは五行五事（書経洪範）六福（同上）六事（左傳襄公二十七年）九職九賦（周禮大宰）等の如く人事や天然物を五六九等の数を以て綜括する風習に誘はれて起り来つたものである。即ち五穀九穀等の名が先づ定まつて然る後黍稷等実際の穀物を之に当嵌めたので、始めから何々を五穀とし九穀とすると確定されたわけではない。随つて学者の意見の区々たるのも当然で、強ちどれが正しくてどれが誤つて居るとも定め難い。唯是に依つて支那古代に於ける重要穀物を窺ふことが出来ればよい。〉を引用して、五穀の内容が各時代あるいは各地域に於ける穀類個々の食習上の価値観の相違によって、違っているのは当然であるとしている。

古代中国の五穀

古代中国古典と伝典に見られる五穀の内容を表2にまとめた。五穀の内容は時代や地域によって異なるが、キビ（黍²⁾・稷³⁾）・アワ（粱⁴⁾・秫⁵⁾）・マメ（菽⁶⁾・豆⁷⁾）（大豆ないし小豆）・ムギ（麦⁸⁾）（大麦ないし小麦）・イネ（稻⁹⁾）・アサ（麻¹⁰⁾）あるいはゴマ（胡麻）のうちいずれかであることが多く、おもに、(1) 麻・黍・稷・麦・豆の五種を挙げて稲を含まない説と (2) 黍・稷・菽・麦・稲の五種を挙げて稲を含む説の二つの説がある。その他の組み合わせの説もあるが、どの説にも菽（豆）が含まれる点に注意すべきで⁶⁾、マメ（菽・豆）が中国で重要な穀物であったことを示すものである。

(1) 麻・黍・稷・麦・豆とする説

①戦国時代 秦の呂不韋が諸儒に論述させた書『呂氏春

秋』⁸⁾十二紀（BC 240年頃）及びこれを受けた戦国時代の『礼記』⁹⁾（BC 275年～BC 221年頃）月令ならびに『淮南子』¹⁰⁾（BC 179～122年頃）時則訓では、天子が明堂で行う月次の祭祀に用いる穀物は「麻（秋）・黍（冬）・稷（中央）・麦（春）・豆（夏）」の五つである⁴⁾⁵¹⁾。この説は、祭祀に用いる穀物は中国内陸部では陸田作物が重要であったことを示しており、稲は含まれていない点に注目すべきである⁶⁾⁷⁾。

②鄭玄（後漢末170年頃の人）は『周礼』天官疾醫の「以五味五穀五菜 養其病」に注¹¹⁾して、「麻黍稷麦豆」を挙げている^(注9)。その根拠について、狩谷『箋注倭名類聚抄』¹²⁾や松本『支那ニ於ケル義倉及社倉・四民生活・耕地制度・穀物ノ名称ノ研究』¹³⁾は鄭玄の注は上記『呂氏春秋』十二紀に拠ったものであろうとする。その後、古文書を注釈した者の多くは鄭玄に従うという¹³⁾。

たとえば、『後漢書』明帝紀の五穀における章懷太子李賢（唐651年～684年の人）の注¹⁴⁾は「鄭玄注周禮云」として、「黍、稷、麥、麻、菽」である^(注10)。

漢代の『大戴礼』¹⁵⁾曾子天圓に「成五穀之名」とあり、北周の盧辯の注²⁾にも「黍・稷・麻・麦・菽」とあり、「豆」が「菽」となっている他は、『周礼』天官疾醫の鄭玄の注¹¹⁾に同じである。

『莊子』^{5) a)}内篇逍遙第一と外篇在宥第十一の五穀についての唐の成玄英による疏^{5) b)}にも「黍・稷・麻・菽・麦」とある^(注11)。

(2) 黍・稷・菽・麦・稲とする説

古代中国で主要な五種類の穀物を「五種」と呼ぶこともある（表1の『管子』、『呂氏春秋』）。黍・稷・菽・麦・稲は五種で挙げる穀物である。「五種」については月

令に「出五種」の文があり⁵¹⁾、『史記』¹⁶⁾五帝本紀第一黄帝に「五種を栽」の文があり、劉宋の裴駟は「鄭玄曰五種、黍、稷、菽、麥、稻也」と注する¹⁶⁾(注¹²⁾。『周礼』卷三十三夏官職方氏における河南豫州地方の土質に適する(五種)の鄭玄注¹¹⁾をみると「黍・稷・菽・麥・稻」を挙げる³⁾(注¹³⁾(注¹⁴⁾(注¹⁵⁾)。河南豫州は黄河の南にあり、イネ(稻)の栽培が盛んであったことがわかる。

五穀と五種の内容を比べると、黍、稷、麥、豆は共通であり、加えて五穀には麻が入り、五種には稻が入る。ところが、五穀と五種は混乱してしまっている場合もある。

『漢書』食貨志¹⁷⁾¹⁸⁾の五種の注に顔師古(初唐 581年-645年の人)曰くとして「黍・稷・麻・麥・豆」を挙げている²⁾¹²⁾(注¹⁶⁾(注¹⁷⁾)。これは『周礼』天官疾醫〈五穀〉の鄭玄の注¹¹⁾と同じである。

狩谷『箋注倭名類聚抄』¹²⁾は、『孟子』注、『淮南子』注¹⁸⁾、『後漢書』班彪傳注など皆(五穀を注する際に鄭玄の五種の注に従って)黍・稷・菽・麥・稻とすると指摘している¹³⁾。実際に『孟子』滕文公章句上「五穀熟而民人育」に対する後漢の趙岐の注²⁾¹⁹⁾⁵¹⁾(注¹⁹⁾(注²⁰⁾)や「五穀不登」に対する宋の朱熹の注²⁰⁾及び『後漢書』班彪列傳第三十上の「五穀垂穎」に対する唐の李賢による注²¹⁾(注²¹⁾)をみると、黍・稷・菽・麥・稻となっており、『周礼』夏官職方氏五種の鄭玄注に同じである。他方、李賢¹⁴⁾は『後漢書』明帝紀第二の「五穀登衍」の五穀に対して前述¹⁾のように『周礼』天官疾醫五穀の鄭玄注¹¹⁾にならって「黍・麥・麻・苽(=豆)」と注しており、ここでは稻を挙げていない。このように、五穀と五種は混乱してしまっている。

(3) その他の説

- ① 稻・稷・麥・豆・麻。『楚辭』²²⁾²³⁾大招に〈五穀六仞〉とあり、注に「五穀は稻・稷・麥・豆・麻なり」とある²⁾²⁴⁾⁵¹⁾(注²²⁾)。
- ② 黍・秫・大菽・稻・麥。『管子』²⁵⁾卷十九 地員篇では、〈五種無不宜〉の語があり、各地に適した穀として、黍・秫・大菽・麥・稻を挙げる⁶⁾¹³⁾(注²³⁾)。
- ③ 麥・黍・稻・粟¹¹⁾・菽。松本『支那ニ於ケル義倉及社會・四民生活・耕地制度・穀物ノ名称ノ研究：』¹³⁾が『逸周書』五穀に数えると記す⁶⁾(注²⁴⁾)。
- ④ 麥・稻・菽・麻・禾¹²⁾。唐の徐堅〔撰〕『初学記』²⁶⁾五穀に記載された越の計然(BC 470頃の人)の説⁶⁾¹³⁾。黍がないことに注目⁶⁾(注²⁵⁾)。
- ⑤ 粳米¹³⁾・小豆・麥・大豆・黄黍¹⁴⁾。『黄帝素問(素

問)』²⁷⁾卷第七藏氣法時論「五穀為養^ト五果^ヲ為助^ト五畜^ヲ為益^ト五菜^ヲ為充^ト」における唐の王冰(AD 710~804年頃の人)の注に「粳米・小豆・麥・大豆・黄黍を謂う也」とある²⁾³⁾³⁴⁾。

- ⑥ 禾・黍・稷・稻・麥。清の程瑤田(1770年頃の人)が『九穀考』²⁸⁾に挙げる¹³⁾。この説には豆が出てこない。
- ⑦ 稻穀・大麥・小麥・粟¹⁵⁾・白芥子¹⁶⁾。『成就妙法蓮華經主瑜伽觀智儀軌(法華儀軌)』にある²⁾²⁴⁾。五穀は密教の修行で使われた五種類の食物を言うこともある。
- ⑧ 大麥・小麥・稻穀・小豆・胡麻¹⁷⁾。『建立曼荼羅護摩儀軌』にある²⁾³⁾。
- ⑨ 稻穀・大麥・小麥・小豆・胡麻。『蘇悉地羯囉經』²⁹⁾にある。

五穀に挙げられる植物の注

*1 穀

穀という字はあるいはアワにあるいは穀物全体として用いられる²⁾⁴⁾。堅い穀に包まれた草木の実の意である³⁰⁾。

*2 黍

キビ。モチキビ³¹⁾。イネ科のキビはもちキビとうるちキビに大別されるが、多く栽培されるものはもちキビである³²⁾。もちキビは製粉して餅や団子にする³²⁾。『和名抄』³³⁾に丹黍(一名赤黍、一名黄黍、阿賀歧々比)・秬黍(一名黒黍、久呂岐比)として記されている³⁴⁾。

*3 稷

ウルチキビ³¹⁾。イネ科のうるちキビ。精白して飯、粥とする³²⁾。『和名抄』³³⁾には〈稷米 本草云、稷米 古方反 一名秬、歧比乃毛知〉とある。なお、稷には諸説あり、一説に、漢代にはアワ、唐代にはキビ、また、モロコシ(蜀黍)とされる。モロコシ(蜀黍)は、タカキビ(高黍)²⁾、コウリヤン(高粱)などとも呼ぶ³²⁾。狩谷『箋注倭名類聚抄』¹²⁾も「古の稷は今の蜀黍(モロコシ)である」と注釈しているが、篠田『中国食物史の研究』⁴⁾は〈程瑤田が稷にコウリヤンをあてて以来(『九穀考』)、これに賛成する人も少なくないが(たとえば段玉裁の『説文』注)これはすこしむりで、コウリヤンはけっしてこんな古い作物ではない。〉と述べている。

*4 粱

オオアワ。イネ科。『和名抄』に〈粱米(中略)阿波乃宇留之禰〉とある。

食べ物の名数

表2 中国古文書に見る五穀・五種の内容 (番号は記載順を示す)

	麻	黍	稷	麦	豆	稻	秫・粟	胡麻・白芥子	備考
『呂氏春秋』十二紀	①	②	③	④	⑤				
『礼記』月令	①	②	③	④	⑤				
『淮南子』時則訓	①	②	③	④	⑤				
『周礼』天官疾醫五穀の鄭玄注	①	②	③	④	⑤				
『周礼』夏官職方氏五種の鄭玄注		①	②	④	③(菽)	⑤			五種
『後漢書』明帝紀五穀の李賢注	④	①	②	③	⑤(菽)				〈五穀登衍〉 〈鄭玄注周礼云〉
『後漢書』班彪列伝五穀の李賢注		①	②	④	③(菽)	⑤			〈五穀垂穎〉 『周礼』夏官職方氏五種の鄭玄注に同じ
『大載礼』曾子天圓五穀の盧辯注	③	①	②	④	⑤(菽)				
『史記』黄帝五種の裴駟注		①	②	④	③(菽)	⑤			〈鄭玄曰〉
『漢書』食貨志五種の顔師古注	③	①	②	④	⑤				『周礼』天官疾醫五穀の鄭玄注に同じ
『孟子』滕文公章句五穀の趙岐注		①	②	④	③(菽)	⑤			『周礼』夏官職方氏五種の鄭玄注に同じ
『楚辭』大招五穀の注	⑤		②	③	④	①			〈五穀六飯〉朱熹の注
『管子』地員篇五種		①		④	③(菽)	⑤	②		五種
『逸周書』五穀		②		①	⑤(菽)	③	④粟		松本の書 ¹³⁾ による
『初学記』五穀に記載された越の計然の説	④			①	③(菽)	②	⑤禾		
『黄帝素問』蔵氣法時論五穀の王氷注		⑤黄黍		③	②小豆 ④大豆	①粳米			
『九穀考』五穀		②	③	⑤		④	①禾		
『成就妙法蓮華經主瑜伽觀智儀軌 (法華儀軌)』五穀				②大麦 ③小麦	④菜豆 (りよくとう)	①稻穀		⑤白芥子 (はくかいし)	
『建立曼荼羅護摩儀軌』五穀				①大麦 ②小麦	④小豆	③稻穀		⑤胡麻	
『蘇悉地羯囉經』五穀				②大麦 ③小麦	④小豆	①稻		⑤胡麻	

*5 稊

朮とも書く。オオアワ (梁) ならびにコアワ (粟) のモチ種³¹⁾、モチアワ³¹⁾。『和名抄』³³⁾に〈稊 (中略) 阿波乃毛知 黏粟也)。飯には適當ではないが、餅や酒を作るの適するにとして用いられた³²⁾³⁵⁾。

*6 菽

マメ。豆類の総称²⁾³⁶⁾。特にダイズ (大豆) を指す²⁾³⁶⁾。篠田『中国食物史の研究』⁴⁾は〈ダイズは新嘗祭にはもちいられない。比較的新しい食物である。明堂の月次祭式にはもちいられているので、少なくとも戦国時代にはさかのほれよう。(中略) ただし、古典人のいう大、小マメ (たとえば『周礼』鄭注) はかならずしも今日のダイズ、アズキをさすものではない。ただ大形の豆、小形の豆というだけのものである。注意を要する。〉と述べている。

*7 豆

マメ。主にダイズ (大豆) の別称²⁾³⁶⁾だが、マメ科の食用となる豆類の総称でもある²⁾³⁶⁾。

*8 麦

ムギ。オオムギ (大麦) とコムギ (小麦) がある。ところで、七種粥に使う穀は、米 粟 黍子 稗子 藎子 胡麻子 小豆である³⁷⁾³⁸⁾。七種粥に麦がないのは麦は粥に向かないのであろう。

*9 稻

イネ。稻とも書く。古代中国では粘るものを稻、粘らないものを秔と¹⁾いった²⁾。

*10 麻

アサノミ。アサ (麻) はアサ科アサ属一年草。アサノミにはタンパク質が七分搗き米の八倍もあり、カルシウム、鉄、ビタミン B₁、B₂ も多い³⁸⁾³⁹⁾。

*11 粟

アワ。イネ科エノコログサ属の多年草。もともとは「もみのまの穀物」の意²⁾⁴⁾で穀物の総称であった。『和名抄』³³⁾には〈粟(中略)阿波 禾子也〉と記す。日本ではアワのうち種、ウルチアワをいう。オオアワとコアワとがあるが、日本ではオオアワが多く栽培される。中国では漢以降⁴⁰⁾、実の大きさによりオオアワを「粱」と呼び、コアワを「粟」と呼んで区別するが³¹⁾³²⁾³⁵⁾、日本では『和漢三才図会』⁴⁰⁾巻之百三穀類粟及び『本朝食鑑』⁴¹⁾穀之一 粟が記すように近世以降はウルチオオアワ(大粟、粱)とウルチコアワ(小粟)など粘らないアワの総称として「粟」の字が使われ、粱の字は使わない⁴¹⁾。日本でもコメが主穀となるまではアワが主穀であった³⁸⁾。

*12 禾

アワ¹³⁾またはイネ²⁾。また、穀類の最もよいもの²⁾、穀物の総称²⁾。ここではアワ。『和名抄』³³⁾は「粟」の項に「粟 禾子也」と記すが、禾は粟だけを指す語ではない。禾は穂を垂れた穀物の茎稻の象形文字²⁾で、中国北部の粟作地帯では穀の字とともに粟を表し⁴⁾、中国南部の稲作地帯では穀の字とともに稲を表す。

*13 粳米

イネ科のウルチマイ。コメのウルチ種。「米」は「もみを脱穀したもの」の意⁴⁾。

*14 黄黍

アカキビ。イネ科。『本草和名』⁴²⁾丹黍の項に〈黄黍即赤黍米〉とある。

*15 菜豆

マメ科。泉豆、緑豆とも書き、リョクトウ、リョクズ、ヤエナリ(八重生)ともいう³⁶⁾。京都では俗に文豆ともいう⁴¹⁾。

*16 白芥子

シロカラシナの実。アブラナ科。『本草綱目啓蒙』³¹⁾巻之二十二菜部菜之一 葷辛類 白芥によると、芥の一種にシロガラシ(白芥)というものがある。大抵芥に似ており、葉は欠刻で、Yの字型紋があり、青白色をしている。茎は起ち易いが、中空である。(中略)三月に馥郁とした黄色い花を開き、芥角のような角を結ぶ。子の大きさは粱米おおあぐらいで、黄白色である。(中略)薬用にすべきものである。味は辛辣である。

*17 胡麻

ゴマ。「麻」はゴマ科のゴマ(胡麻)とする説もある。

注及び引用文献 (注:以下アンダーラインは著者)

(注1)『後漢書』¹⁴⁾本紀一 顯宗孝明帝 紀第二に「昔歲、五穀登衍し、今茲、蚕と麦は善取あり。」とあり、唐の章懷太子李賢による注に「五穀とは黍稷麥麻豆なり」、また「登は成なり、衍は饒なり」とある^{14d)}。

十年夏四月戊子、詔曰:昔歲五穀登衍、(夾注)鄭玄注周禮云:「五穀、黍、稷、麥、麻、苽也。」(校)五穀黍稷麥麻苽也 按:校補謂殿本「苽」作「豆」、與周禮原注合。登、成也。衍、饒也、音以戰反。

(注2)『日本書紀』⁴³⁾⁴⁴⁾卷第十一 仁徳天皇 四年に「五穀豊穰なり」とある。

(注3)『續日本紀』⁴⁵⁾卷十三 聖武天皇 天平十一年七月に〈五穀成熟〉の語がある⁴⁶⁾。

甲辰。詔曰。方今孟秋。苗子盛秀。欲令風雨調和。年穀成熟。宜令天下諸寺轉讀五穀成熟經。并悔過七日七夜上焉。

(注4)『六韜』⁴⁷⁾龍韜、立將に〈五穀豊熟、社稷安寧〉とある²⁾。『六韜』は古代中国の代表的な兵法書で、戦国時代には成立していたとされる。

(注5)実は『国語』越語下に〈五穀陸熟〉と1箇所だけ五穀が出てくる⁴⁾。

(注6)表1では古いはずの『管子』に「五穀」があるが、実は『管子』については書かれた時代が新しいとされており、そうであれば「五穀」の語があっても不思議ではない。篠田『中国食物史の研究』⁴⁾は〈元来『管子』は管仲に託してはいるものの、文章も新しく、内容もいやしく、『左伝』や『論語』と同時代にはとうていならべられるわけにはまいらない。よいところせいぜい戦国末期だろう。〉と述べている。

(注7)『莊子素本』^{5a)}及び『重刻莊子南華真經』^{5b)}巻一内篇逍遥遊第一に

不食五穀吸風飲露

とあり、同書 卷四 外篇在宥第十一には

五穀以養民

とある。

(注8)『春秋 左伝』⁴⁸⁾僖公三年〈春不雨夏六月雨不

食べ物の名数

日旱不為災也)の晋の杜預(222年-284年)の注に
 〈周六月、夏四月、於播種五稼無損也〉とある²⁾。

(注9)『周禮注疏』天官疾醫(鄭玄注;賈公彥疏)^{11b)}
 以五味五穀五藥養其病【注】養猶治也病由氣勝
 負而生 攻其羸 養其不足者五味醢酒飴蜜薑鹽
 之屬五穀麻黍稷麥豆也五藥草木蟲石穀也其治合
 之齊則存乎神農子儀之術云(中略)【疏】(中
 略)五穀麻黍稷麥豆也者此依月令五方之穀此五
 穀據養

(注10)『後漢書』¹⁴⁾明帝紀の李賢注は(注1)に示し
 たが、和刻本では〈五穀、黍、稷、麥、麻、米也。〉
 と「ホ」(豆)が「米」の字に見えるもの¹⁴⁾もある。

(注11)『南華真經注疏解經』^{5b)}(郭象注;成玄英疏)及
 びこれを集めた『莊子集釋』^{5c)}(1894年)の『莊子』
 卷一 内篇逍遙遊第一に

不食五穀吸風飲露【注】俱食五穀而獨為神人，
 明神人者非五穀所為，而特稟自然之妙氣【疏】
 五穀者，黍稷麻菽麥也。言神聖之人，降生
 造物，挺淳粹之精靈，(中略)五穀之所為，託風
 露以清虛，豈四時之能變也

とある。

同書 卷四 外篇在宥第十一では

五穀以養民【疏】五穀，黍稷菽麻麥也

とある。

(注12)『史記』¹⁶⁾五帝本紀第一黃帝の劉宋の裴駰の集
 解，唐の司馬貞の索隱に

菽五種，【集解】駰案：菽，樹也。詩云「菽之
 在菽」。周禮曰「穀宜五種」。鄭玄曰「五種，
 黍，稷，菽，麥，稻也」。【索隱】藝，種也，樹
 也。五種即五穀也。

とある。

(注13)『周禮注疏』夏官職方氏(鄭玄注;賈公彥疏)^{11a, b)}

東南曰揚州(中略)其穀宜稻(中略)

正南曰荊州(中略)其穀宜稻(中略)

河南曰豫州(中略)其穀宜五種【注】(中略)

五種 黍稷菽麥稻(中略)

正東曰青州(中略)其穀宜稻麥(中略)

河東曰冀州(中略)其穀宜四種【注】(中略)

四種 黍稷稻麥(中略)

正西曰雍州(中略)其穀宜黍稷(中略)

東北曰幽州(中略)其穀宜三種【注】(中略)

三種 黍稷稻(中略)

河内曰冀州(中略)其穀宜黍稷(中略)

正北曰并州(中略)其穀宜五種【注】(中略)

五種 黍稷菽麥稻也

(注14)『周禮』夏官 職方氏の五種における鄭玄の
 注の根拠は何であろうか。『呂氏春秋』⁸⁾十二紀及び
 『礼記』⁹⁾月令に従うと新嘗祭や大廟に供えるものは
 「猛夏は麦，仲夏は黍，猛秋は穀，仲秋は麻，季秋
 は稻」であり，明堂で月次の祭式で供えるものは
 「麦・菽(豆)・稷・麻・麦・黍」であるので，両者
 は種類が異なっている(篠田『中国食物史の研究』⁴⁾第3表 祭祀と穀物 参照)。「猛秋は穀」の
 「穀」という字は，あるいは穀物全体を指して用い
 られる他アワを指すこともある⁴⁾ので，鄭玄の注は
 この新嘗祭や大廟に供える五種類の穀物「麦・黍・
 粟・麻・稻」⁴⁾が根拠であろう。

(注15)『大漢和辞典』²⁾五種には，〈[周禮、夏官、職
 方氏]河南曰豫州、云々、其穀五種。[注]五
 種、黍・稷・菽・麥・稻。[周禮、夏官、職方氏]
 正北曰并州、云々、其穀五種。[注]黍・稷・
 菽・麥・麻〉とあり，正北并州^{へいしゅう}に適する五種に「黍
 ・稷・菽・麥・麻」を挙げる。しかし，『十三經注
 疏附校勘記 周禮注疏』^{11a, b)}職方氏や『和刻本經書
 集成』第六輯：古注之部 第二輯^{11c)}所収の『周
 禮』職方氏の河南豫州の五種の〔注〕と正北并州^{へいしゅう}
 の五種の〔注〕を見ると，(注14)に示した通りどち
 らも「黍・稷・菽・麥・稻」となっている。『大漢
 和辞典』²⁾が正北并州の五種において稻を麻に代え
 て河南豫州の五種と分け，「黍・稷・菽・麥・麻」
 とする典拠は未見だが，并州^{へいしゅう}は今の山西省太原の乾
 田地帯であり，『知服齋叢書』^{50a)}所収の『逸周書』
 卷第八 職方解第六十二に〈正北曰并州(中略)其
 穀五種〔注〕(中略)五種黍稷菽麥^{周官注}麻^{麻作稻}〕と注が
 あるので(注24)，こうした注に従ったものであろう
 か。

(注16)『漢書』¹⁷⁾¹⁸⁾卷二十四上，食貨志第四上の顔師
 古の説。

種穀必雜五種，以備災害，師古曰 歲月有宜，
 及水旱之利也。種即五穀，謂黍、稷、麻、麥、
 豆也 田中不得有樹用妨五穀
 (穀を種するに必ず五種を雑せ，以て災害に備える。
 田中に樹を植えない。五穀を妨げるためである。)

(注17)『大漢和辞典』²⁾五種の項には〈[漢書，食貨
 志]種穀必雜五種，以備災害。[注]五種，謂
 黍・稷・麻・麥・豆也〉とあるが，『漢書』食貨
 志¹⁷⁾¹⁸⁾〔注〕をみると，(注16)に示した通り〈種

即五穀 謂黍稷麻麥豆也)であり、『大漢和辞典』²⁾の〈〔注〕五種〉は五穀とすべきところであろう。

(注 18) 松本『支那ニ於ケル義倉及社倉・四民生活・耕地制度・穀物ノ名称ノ研究』⁶⁾¹³⁾も〈孟子ノ趙岐の註、淮南子ノ高誘ノ註等之ニ從ヘル者モ亦少ナカラズ〉(注:「之」は『周礼』夏官天職方氏五種の鄭玄の注のこと)と記すが、『淮南子』卷五 時則訓には〈令民出五種〉の語はあるが²⁾、高誘の『淮南鴻烈解』¹⁰⁾でも〈五種〉に語注記はない。五穀の語注記も未見。

(注 19) 『孟子注疏』¹⁹⁾卷第五下 滕文公章句上〈五穀熟而民人育〉における後漢の趙岐の注²⁾¹⁹⁾³⁴⁾によると

后稷教民稼穡樹藝五穀△五穀熟而民人育兼為后稷也樹種藝殖也五穀謂稻黍稷麥菽也五穀所以養人也 故言民人育也人

(后稷は民に稼穡を教へ、五穀を樹藝す。五穀熟して民人育す。(中略)五穀は稻・黍・稷・麥・菽なり。)

とある。また、『孟子集註』²⁰⁾孟子卷之五 滕文公章句上「五穀不登」における宋の朱熹(1130-1200年)の注は

五穀不登(中略)五穀、稻黍稷麥菽也。登、成熟也。

とある。

(注 20) 日本には『大和本草』が孟子の注を紹介している³⁴⁾。『大漢和辞典』²⁾『大辭典』⁴⁹⁾も同じ。

(注 21) 『後漢書』²¹⁾卷四十上 班彪列傳第三十上〈五穀垂穎〉の唐の章懷太子李賢による注。

五穀、黍稷菽麥稻也 爾雅、曰禾、稌、謂之穎、

(注 22) 『楚辭』には後漢の王逸の楚辭章句本と南宋の朱熹の楚辭集註本の両系統がある。『大辭典』⁴⁹⁾や『日本国語大辭典』²⁴⁾五穀は「王逸の注には五穀は稻・稷・麥・豆・麻とある」というが²⁾²⁴⁾、楚辭章句系の『王註楚辭』²²⁾の王逸の注には見えない。『大和本草』³⁴⁾は〈楚辭註以稻稷麥豆麻為五穀〉とのみ記す。

『廣文庫』⁴⁶⁾も〈楚辭註〉とのみ記す。一方、『大漢和辞典』²⁾には〈〔楚辭、大招〕五穀六仞、設二菰梁一只。〔集注〕五穀、稻・稷・麥豆・麻也〉とあり、『楚辭集註』²³⁾朱熹の注には〈五穀 稻稷麥豆麻也 仞伸臂一尋八尺也 言積穀之多也〉とある。ここは朱熹の注に従う。

(注 23) 『管子』²⁵⁾卷十九 地員篇

夫管仲之匡天下也、其施七尺(中略)瀆田悉

徒、五種無不宜(中略)赤墮、歷彊肥、五種無不宜(中略)黃唐、無宜也、唯宜黍稷也(中略)斥埴、宜大菽與麥(中略)黑埴、宜稻麥(後略)

(注 24) 松本『支那ニ於ケル義倉及社倉・四民生活・耕地制度・穀物ノ名称ノ研究』¹³⁾が『逸周書』の五穀を麥・黍・稻・粟・菽と記す⁶⁾。中国哲学書電子化計画所収の『逸周書』^{50b)}器服に「然後五穀興」の語があるが、語注はない。『知服齋叢書』⁵⁰⁾所収の『逸周書』卷第十 器服にはこの語はないので語注は未見。『知服齋叢書』^{50a)}所収の『逸周書』卷第八 職方解第六十二に

河南曰豫州(中略)其穀宜五種〔注〕(中略)五種謂黍稷菽麥稻也。(中略)正北曰并州(中略)其穀宜五種〔注〕(中略)五種黍稷菽麥麻周官注麻作稻

とあり、五種の語がある。五種の晋の孔晁の注は『周礼』五種の鄭玄注と同じである。

(注 25) 『初學記』²⁶⁾卷二十七 五穀第十に

范子計然曰 五穀者 萬民之命 国之重寶 東方多麥稻西方多麻 北方多菽 中央多禾

とある。『初學記』²⁶⁾はこの他にも中国古典に見られる穀物の名数を数多く記している。

参考文献

- 1) 「食べ物の名数(1)五穀(下):日本古典に見られる五穀」, 森田潤司, 同志社女子大学生生活科学, 45, 100-110, 2012
- 2) 『大漢和辞典』修訂版, 諸橋轍次〔著〕; 鎌田 正・米山寅太郎〔修訂〕, 大修館書店, 1984
- 3) 『医心方 卷三十 食養篇』, 丹波康頼〔撰〕; 横佐知子〔全訳精解〕, 筑摩書房, 1993
- 4) 『中国食物史の研究』, 篠田 統, 八坂書房, 1978
- 5) a. 『和刻本諸子大成 第十一輯 莊子素本; 南華真經注疏解経; 莊子虞齋口義(上)』, 長沢規矩也〔編〕, 古典研究会〔出版〕, 汲古書院, 1976/
b. 『重刻莊子南華真經』, (晋)郭象〔注〕; 千葉玄之〔読〕, 早稲田大学図書館古典籍総合データベース所収/
c. 『莊子集釈』, 莊子〔著〕; (清)郭慶藩〔輯・集釋〕; (晋)郭象〔注〕; (唐)成玄英〔疏〕; (唐)陸德明〔釋文〕, 小樽商科大学付属図書館貴重図書漢籍全文画像データ
- 6) 『日本古代穀物史の研究』, 鑄方貞亮, 吉川弘文館, 1977

- 7) 『支那古田制の研究』第二章 孟子其他の古書に見えた耕地及宅地の制度, 第二節 耕地, 第一項 周代に於ける耕地の分配, 加藤 繁, 京都法学会, 1916, 法律学研究叢書第17冊 (国立国会図書館近代デジタルライブラリー所収)
- 8) a. 『和刻本諸子大成 第八輯 呂氏春秋; (改正) 淮南鴻烈解; 淮南子〔箋釋〕, 長澤規矩也〔編〕, 古典研究會〔出版〕, 汲古書院〔發行〕, 1976 / b. 『呂氏春秋』上・中・下, 呂不韋〔著〕; 楠山春樹〔訳著〕, 明治書院, 1996. 7-1998. 11 / c. 『呂氏春秋』, 高誘〔注〕; 畢氏〔校正〕, 早稲田大学図書館古典籍総合データベース所収
- 9) 『重栞宋本禮記注疏附校勘記』, (漢) 鄭元〔注〕; (唐) 孔穎達〔疏〕(『十三經注疏附校勘記〔五卷〕禮記正義』, (清) 阮元〔校勘〕, 中文出版社, 1989 所収)
- 10) 『淮南鴻烈解』(『和刻本諸子大成 第八輯 呂氏春秋; (改正) 淮南鴻烈解; 淮南子〔箋釋〕, 長沢規矩也蔵〔編〕, 古典研究會〔出版〕, 汲古書院, 1976 所収) (注:『(改正) 淮南鴻烈解』は後漢高誘注の淮南子, 『淮南子〔箋釋〕』は高誘の注を補ったもの)
- 11) a. 『重栞宋本周禮注疏附校勘記』, (漢) 鄭元氏〔注〕; (唐) 賈公彥〔疏〕(『十三經注疏附校勘記〔三卷〕周禮注疏』, [清] 阮元〔校勘〕, 中文出版社, 1989 所収) / b. 『重刊宋本十三經注疏附校勘記 重栞宋本周禮注疏附校勘記』, 台湾中央研究院歷史語言研究所 漢籍電子文獻資料庫所収 / c. 『周禮』(永懷堂本), 43 卷, (漢) 鄭玄〔注〕; (明) 金蟠・葛廡〔校〕(『和刻本經書集成 第六輯: 古注之部 第二輯 周禮 (永懷堂本); 儀禮; 學記; 孝經 [孔子傳]; 古文孝經 (足利本); 孝經 (開元御注本); 孝經御註譯義』, 長澤規矩也〔編〕, 古典研究會, 1976 所収) (注:『周礼』は, 周王朝の理想的な制度について周公旦が記録したものと伝えられるが, 実際の成立は戦国時代以降前漢の頃とされる。)
- 12) a 『箋注倭名類聚抄』, 狩谷椽齋〔著〕; 京都帝国大學分學部國語學分學研究室〔編〕, 全國書房, 1943 / b 『諸本集成倭名類聚抄 本文篇, 索引篇, 外篇』増訂再版, 源順〔撰〕, 京都大學文學部國語學國文學研究室〔編〕, 臨川書店, 1971 / c. 『倭名類聚鈔: 椽齋書入』, 源順〔著〕; 辻村敏樹〔編〕, 早稲田大学出版部, 1987
- 13) 『支那ニ於ケル義倉及社倉・四民生活・耕地制度・穀物ノ名稱ノ研究: 米穀資料第19』, 松本洪〔著〕; 農林省米穀部〔編〕, 日本米穀協会, 1940 (注:『支那ニ於ケル義倉及社倉・四民生活・耕地制度・穀物ノ名稱ノ研究: 米穀資料第19』, 農林省米穀部〔編纂〕, 大日本農會, 1933 では pp.183-188 に所収)
- 14) a. 『後漢書』, (劉宋) 范曄〔撰〕; (唐) 李賢等〔注〕; (晉) 司馬彪〔補志〕; 楊家駱〔主編〕, 台湾中央研究院歷史語言研究所 漢籍電子文獻資料庫所収 / b. 『後漢書 1-90』, 范曄〔撰〕; 章懷太子〔注〕, 早稲田大学図書館古典籍総合データベース所収 / c. 『和刻本正史 後漢書 (影印本) (一) 帝紀・志・列傳 (上)』, 范曄〔撰〕; 司馬彪〔著〕; 李賢〔注〕; 長沢規矩也〔解題〕, 古典研究會〔出版〕, 汲古書院〔發行〕, 1972 (注:長澤規矩也蔵本の複製・縮刷版) / d. 『後漢書 第一冊本紀一 (卷一〜卷五)』, 范曄〔撰〕; 李賢〔注〕; 吉川忠夫〔訓注〕, 岩波書店, 2001
- 15) 『和刻本經書集成 第四輯: 檀弓; 大戴禮記; 論語; 孟子』, 長澤規矩也〔編〕, 古典研究會, 汲古書院〔發行〕, 1976
- 16) a. 『史記』, 司馬遷〔撰〕; 裴駟〔集解〕, 早稲田大学図書館古典籍総合データベース所収 / b. 『史記』, (漢) 司馬遷〔撰〕; (劉宋) 裴駟〔集解〕; (唐) 司馬貞〔索隱〕; (唐) 張守節〔正義〕, 台湾中央研究院歷史語言研究所 漢籍電子文獻資料庫所収
- 17) 『漢書』, (漢) 班固〔撰〕; (唐) 顏師古〔注〕; 楊家駱〔主編〕, 台湾中央研究院歷史語言研究所 漢籍電子文獻資料庫所収
- 18) 『和刻本正史 漢書 (影印本) (一) 帝紀・表・志・列傳 (上)』, 班固〔撰〕; 桃林軒女朴〔點〕, 古典研究會〔出版〕, 汲古書院, 1972
- 19) a. 『重栞宋本孟子注疏附校勘記』, 趙岐氏〔注〕; 孫奭〔疏〕(『十三經注疏附校勘記〔八卷〕論語注疏 孝經注疏 爾雅注疏 孟子注疏經』, [清] 阮元〔校勘〕, 中文出版社, 1989 所収) / b. 『重刊宋本十三經注疏附校勘記 重栞宋本孟子注疏附校勘記』, 趙氏〔注〕; 孫奭〔疏〕, 台湾中央研究院歷史語言研究所 漢籍電子文獻資料庫所収
- 20) 『孟子集註』卷之1-14, 朱熹〔集註〕; 山崎嘉〔点〕, 早稲田大学図書館古典籍総合データベース所収
- 21) a. 『和刻本正史 後漢書 (影印本) (二) 列傳 (中)』, 范曄〔撰〕; 司馬彪〔著〕; 李賢〔注〕; 長

- 沢規矩也〔解題〕, 古典研究會〔出版〕, 汲古書院〔発行〕, 1972 (注: 長澤規矩也蔵本の複製・縮刷版)
 /b. 『後漢書 第五冊列伝三 (巻二十一～巻三十一)』, 范曄〔撰〕; 李賢〔注〕; 吉川忠夫〔訓注〕, 岩波書店, 2003
- 22) 『王註楚辭』, 劉向〔編〕; 王逸〔註〕; 洪興祖〔補注〕, 早稲田大学図書館古典籍総合データベース所収
- 23) 『楚辭集註』, (宋) 朱熹〔註〕, 小樽商科大学附属図書館貴重図書全文画像データ (漢籍) 所収
- 24) 『日本国語大辞典』第2版, 日本国語大辞典第二版編集委員会・小学館国語辞典編集部〔編〕, 小学館, 2000
- 25) 『管子』, (唐) 房玄齡〔注釈〕; (唐) 劉績〔増注〕 (『和刻本諸子大成 第五輯 管氏; 商子; 韓非子; 撰叢書集要』, 長沢規矩也蔵〔編〕, 古典研究會〔出版〕, 汲古書院, 1975 所収)
- 26) 『初學記』, (唐) 徐堅等〔撰〕, 出版地不明, 出版者不明, 1961 (同志社女子大学図書館所蔵)
- 27) 『重広補註黄帝内経素問』, 王冰〔撰〕, 早稲田大学図書館古典籍総合データベース所収
- 28) 『九穀考』, (清) 程瑤田〔著〕, 鹿児島大学附属図書館所蔵
- 29) 『密教大辞典』増訂版, 密教辞典編集會〔編〕, 法蔵館, 1968
- 30) 『字通』, 白川 静, 平凡社, 1996
- 31) 『本草綱目啓蒙-本文・研究・索引-』, 小野蘭山〔著〕; 杉本つとむ〔編著〕, 早稲田大学出版部, 1974
- 32) 『雑穀-その科学と利用-』, 小原哲二郎, 樹村房, 1981
- 33) a. 『倭名類聚鈔: 掖斎書入』1巻・2巻, 源 順〔著〕; 辻村敏樹〔編〕, 早稲田大学出版部, 1987 /b. 『倭名類聚鈔』, 源 順〔著〕; 正宗敦夫〔編纂校訂〕, 現代思潮社, 1978 (注: 底本は二十巻本の那波道圓〔校注〕「元和古活字本」) /c. 『諸本集成 倭名類聚抄本文篇, 索引篇, 外篇』増訂再版, 源順〔撰〕, 京都大學文學部國語學國文學研究室〔編〕, 臨川書店, 1971 (注: [本文編] は箋注倭名類聚抄, 真福寺本 (稲葉通邦摹刻本), 元和古活字那波道圓本 (二十巻本), 高山寺本 (史料編纂所古簡集影) を所収) /e. 『倭名類聚抄 天文本』源順〔撰〕; 東京大学国語研究室〔編〕, 汲古書院, 1987 (東京大学国語研究室 資料叢書 第12巻) /d. 『倭名類聚抄 京本, 世俗字類抄 二巻本』, 東京大学国語研究室〔編〕, 汲古書院, 1985
- 34) 『大和本草』, 見原篤信〔原著〕; 白井光太郎〔考註〕 (第一冊), 岸田松若・田中茂穂・矢野宗幹〔考註〕 (第二冊), 有明書房, 1975
- 35) 『本草綱目』, (明) 李時珍撰, 商務印書館, 1954
- 36) 『図説 草木名彙辞典』, 木村陽二郎〔監修〕, 柏書房, 1991
- 37) 『新訂増補国史大系 第二十六巻 交替式; 弘仁式; 延喜式』, 黑板勝美・國史大系編修會〔編〕, 吉川弘文館, 1965
- 38) 「季節を祝う食べ物 (1) 新年を祝う七種粥と小豆粥」, 森田潤司, 同志社女子大学生生活科学, 44, 79-83, 2010
- 39) 『日本食品標準成分表 2010』, 文部科学省科学技術・學術審議會資源調査分科会〔編〕, 全国官報販売協同組合, 2010
- 40) a. 『和漢三才図会 18』, 寺島良安〔著〕; 島田勇雄・竹島淳夫・樋口元巳・下中 弘〔訳注〕, 平凡社, 1991, 東洋文庫 532 /b. 『和漢三才圖會』, 寺島良安〔編〕; 和漢三才圖會刊行委員会〔編集〕, 東京美術, 1970
- 41) 『本朝食鑑 1』, 人見必大〔著〕; 島田勇雄〔訳注〕, 平凡社, 1976, 東洋文庫 296
- 42) 『本草和名』, 深江輔仁〔著〕; 正宗敦夫〔編纂校訂〕, 現代思潮社, 1978
- 43) 『日本書紀①②③ (全三冊)』, 小島憲之・直木孝次郎・西宮一民・藏中 進・毛利正守〔校注・訳〕, 小学館, 1994-1998
- 44) 『新訂増補 國史大系 第一巻下 日本書紀 後篇』, 黑板勝美・國史大系編修會〔編〕, 吉川弘文館, 1967
- 45) 『新訂増補 國史大系 第二巻 續日本紀』, 黑板勝美・國史大系編修會〔編〕, 吉川弘文館, 1965
- 46) 『廣文庫』再版第七冊, 物集高見, 廣文庫刊行會, 1926
- 47) 『六韜』, 中國哲學書電子化計劃所収
- 48) a. 『重栞宋本左傳注疏附校勘記』, (晋) 杜預〔注〕; (唐) 穎達〔疏〕 (『十三經注疏附校勘記 [六巻] 春秋左傳正義』, (清) 阮元校勘, 中文出版社, 1989 所収) /b. 『重刊宋本十三經注疏附校勘記/重栞宋本左傳注疏附校勘記/僖公/附釋音春秋左傳注疏 卷第十二/三年 p.200-2』, 台湾中央研究院歷史語言研究所 漢籍電子文獻所収/

食べ物の名数

- c. 『春秋左氏伝校本』第 1-30, 杜預〔集解〕; 陸徳明〔音義〕; 秦鼎〔校本〕, 早稲田大学図書館古典籍総合データベース所収
- 49) 『大辭典』, 下中彌三郎〔編・発行〕, 平凡社, 1935
- 50) a. 『知服齋叢書』, 竜鳳〔編〕, 第 1 集: 逸周書, (晋) 孔晁〔注〕, 早稲田大学図書館古典籍総合データベース所収 / b. 『逸周書』, 中國哲學書電子化計劃所収 (注: 『逸周書』は西晋の時汲郡の家中より出たりと称せられる書, 学者皆戦国時代の偽書となす).
- 51) 『小學紺珠』卷五動植類 (『小学紺珠』卷第 1-10, 王応麟〔輯〕; 村瀬誨輔〔校正〕, 早稲田大学図書館古典籍総合データベース所収)

(2011 年 11 月 9 日受理)